

ハンナ

I サムエル記

1:1サムエル記の背景

ラマタイム・ツオフィム([英語](#) Ramathaim)は[エフライム山地](#)の町で、ラマとも呼ばれる。[サムエル](#)の出身地と葬られた場所として知られる。

サムエルはラマで生まれ、[シロ](#)で少年時代を過ごしたのち、ラマに戻り主のために祭壇を築いて、最後の士師としてイスラエル人を裁いた。^[1]

イスラエルの長老たちはラマにいたサムエルのところに王を立ててほしいと要求した。^[2]そこで、サムエルが最初の王になる[サウル](#)と最初に会い油を注いだのがラマである。^[3]

のちに、[ベツレヘム](#)でサムエルに油を注がれたダビデは、後にサウルの追っ手を逃れて、ラマに行き[ナヨテ](#)と呼ばれる預言者集団に匿ってもらった。(ウィキペディアより)

[エフライムの山地ラマタイム・ツオフィム](#) (ラマ)に住んでいた[エルカナ](#)・・・サムエルの父となる人

脚注から

I 歴代6:22-28

- 6:22 ケハテ族は、その子、アミナダブ、その子のコラ、その子のアシル、
6:23 その子のエルカナ、その子のエブヤサフ、その子のアシル、
6:24 その子のタハテ、その子のウリエル、その子のウジヤ、その子のサウル。
6:25 エルカナの子孫は、アマサイ、アヒモテ。
6:26 エルカナの子、エルカナ、その子のツオフアイ、その子のナハテ、
6:27 その子のエリアブ、その子のエロハム、その子の[エルカナ](#)。
6:28 [サムエル](#)の子は、長子ヨエル、次男アビヤ。

I 歴代6:33-38

- 6:33 仕えた者たちとその一族は次のとおりである。ケハテ族からは歌い手ヘマン。彼はヨエルの子、順次さかのぼって、[サムエル](#)の子、
6:34 [エルカナ](#)の子、エロハムの子、エリエルの子、[トアハ](#)の子、
6:35 [ツフ](#)の子、エルカナの子、マハテの子、アマサイの子、
6:36 エルカナの子、ヨエルの子、アザルヤの子、ゼパニヤの子、
6:37 タハテの子、アシルの子、エブヤサフの子、コラの子、

6:38 イツハルの子、ケハテの子、レビの子、イスラエルの子。
エルカナの家系はレビ族のなかのケハテ族

民数記

4:4 ケハテ族の会見の天幕での奉仕は、最も聖なるものにかかわることであって次のとおりである。

4:15 宿営が進むときは、アロンとその子らが聖なるものと聖所のすべての器具をおおい終わって、その後にケハテ族が入って来て、これらを運ばなければならない。彼らが聖なるものに触れて死なないためである。これらは会見の天幕で、ケハテ族のになうものである。

ケハテ族は聖所の聖なる器具を運ぶ係だった。

エフライムの山地のラマタイム・ツォフィムにいたのだから、士師記でエフライムに移り住んだレビ人の子孫であったのだろう。

サムエルが最後の士師とよく言われているので、未だ士師記の延長線上にあったはず。

士師記のキーワード「[そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた](#)」があてはまる時代だったはず。ほとんどルツ記と同時代の話。

I サムエル1:2

「[エルカナには、ふたりの妻があった。](#)」かなり乱れた時代なので、レビ人も一夫多妻制。

「[ひとりの妻の名はハンナ、もうひとりの妻の名はペニンナと言った。ペニンナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった。](#)」ハンナはヘブル語で「恵み」という意味。ハンナの名前が先に来ているので、ハンナが第一夫人であったと考えられる。ハンナに子どもがいないので、エルカナはペニンナを二人目の妻として迎えた可能性もある。1:5で、「[彼がハンナを愛していた](#)」と書かれていることから、子どもを得る目的であった可能性がある。いずれにしても、複数の妻を持ったことから家庭内の問題が出てきた。しかし、その問題をも神は用いられることとなる。

1:3-4 エルカナの礼拝生活と人となり

「[この人は自分の町から毎年シロに上って、万軍の【主】を礼拝し、いけにえをささげていた。](#)」エルカナは主を礼拝する生活をしていたことがわかる。士師記の乱れた時

代に主を礼拝する生活ができていることはすごいことかもしれない。士師記の中には、レビ人なのに、私利私欲で動いている人が登場するのだから、このレビ族のエルカナの家族が神の目に留まったことは、不思議ではないかも。ちなみに、エルカナの出身地のラマはベテルより南で、そこから神の宮があったシロまでは、すごく遠い訳ではないが、近くもない。

「そこにはエリのふたりの息子、【主】の祭司ホフニとピネハスがいた。」伏線になっている。

参考) I サム

2:12 さて、エリの息子たちは、よこしまな者で、【主】を知らず、

2:13 民にかかわる祭司の定めについてもそうであった。

1:4 その日になると、エルカナはいけにえをささげ、妻のペニンナ、彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えた。捧げ物をし、そして家族に受ける分を与える夫であり、父であった。受ける分があるということは、和解のいけにえであったことが分かる。

1:5-8 ハンナが請願の祈りをする経緯（自分がハンナだったら、ペニンナだったらどうだろう？）

1:5 「しかしハンナには特別の受け分を与えていた。【主】は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。」3 版の訳だと、エルカナがハンナを愛していたから特別（別格）の受け分を与えたことが強調されている。2 版の訳は、「また、ハンナに、一人の人の受ける分を与えていた。彼はハンナを愛していたが、主が彼女の胎を閉じておられたからである。」2 版の訳だと、エルカナはハンナを愛して、頑張っただけで夫婦関係をもっていたけれど、子どもができなかったのは、主がハンナの胎を閉じておられたということが強調されている感じ。いずれにしても、エルカナはハンナを愛していたのに、主がハンナの胎を閉じておられたので、子どもができなかったことが分かる。

1:6 彼女を憎むペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにした。

エルカナの愛をあまり受けられず、しかも受けるものにもハンナと差をつけられたペニンナはハンナを憎むようになり、主がハンナの胎を閉じておられることを知りつつ、嫉妬心からハンナに意地悪をする。しかし、このことがハンナを請願の祈りに導くことになる。女性同士の嫉妬心や争いまで、あらゆることを用いられる主。信じる者のためにすべてを益として下さる主。

1:7 毎年、このようにして、彼女が【主】の宮に上って行くたびに、ペニンナは彼女をいらだたせた。そのためハンナは泣いて、食事をしようとしなかった。

1:8 それで夫エルカナは彼女に言った。「ハンナ。なぜ、泣くのか。どうして、食べな

いのか。どうして、ふさいでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」

エルカナの反応をどう思うか？夫にこのような態度をとられた時に、あなたならどのような対処をするか？ペニンナの嫌がらせは毎年、何年も続き、主に礼拝するすばらしい時間であるはずの時間が、ハンナにとって悲しみの時間、食事さえできなくなる時間になっていった。子どもが欲しいと訴えている妻に対し、夫のエルカナはとんちんかんな答え。あまり慰めになっていない。ハンナの場合は、次を見れば分かるけれど、神に自分の気持ちをぶつけている。神に祈っている。それが、結果的に神に用いられる器となっていく第一ステップであった。

1:9－1:11ハンナの決意・・・請願の祈りへ

ハンナの祈りから学べることは何か？

1:9 「シロでの食事が終わって、ハンナは立ち上がった。」とうとう神様に訴えることを決意したハンナ。

1:10 「ハンナの心は痛んでいた。彼女は【主】に祈って、激しく泣いた。」長年のペニンナからの嫌がらせに心を傷つけられていたハンナは、子どもをお与えになることができる主に心を注ぎだして祈った。その祈りが請願を立てるに至る。

1:11 ハンナの祈り、請願は、「万軍の【主】よ。」という呼びかけから始まる。ハンナは、主を万の天使を従えておられる力ある方であると認め、祈っています。祈りは誰に対して祈っているかが大切。

聖書の中で、軽々しく誓いを立てることを戒めているので、ハンナが請願の祈りを立てたのは、相当のことであったと考えられる。ハンナが神と取引をしているかのような表現が出てくる。請願の祈りなので、そうなっているのでしょう。「もし、あなたが、はしたための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら」・・・ハンナの願いは、男の子です。自分が男の子を産む器となることを願います。そして、その願いがかなえられた時に、ハンナがすることは、「私はその子の一生を【主】におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」生まれてくる子を主に捧げ、ナジル人として育てるというもの。

士師記の時代が終わろうとしていたが、「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」、そのように乱れて混乱していた時に、主は人々を導く「士師」を必要とされていた。その御心にかなう祈りをするに至ったハンナ。その祈りは答えられることとなる。

参考)民数記6:2－21ナジル人について

6:2 「イスラエル人に告げて言え。男または女が【主】のものとして身を聖別するため特別な誓いをして、ナジル人の誓願を立てる場合、

6:3 ぶどう酒や強い酒を断たなければならない。ぶどう酒の酢や強い酒の酢を飲ん

ではない。ぶどう汁をいっさい飲んでではない。ぶどうの実の生のものも干したのものも食べてはならない。

6:4 彼のナジル人としての聖別の期間には、ぶどうの木から生じるものはすべて、種も皮も食べてはならない。

6:5 彼がナジル人としての聖別の誓願を立てている間、頭にかみそりを当ててはならない。【主】のものとして身を聖別している期間が満ちるまで、彼は聖なるものであって、頭の髪の毛をのばしておかなければならない。

6:6 【主】のものとして身を聖別している間は、死体に近づいてはならない。

6:7 父、母、兄弟、姉妹が死んだ場合でも、彼らのため身を汚してはならない。その頭には神の聖別があるからである。

6:8 彼は、ナジル人としての聖別の期間は、【主】に聖なるものである。

6:9 もしだれかが突然、彼のそばで死んで、その聖別された頭を汚した場合、彼は、その身をきよめる日に頭をそる。すなわち七日目にそらなければならない。

6:10 そして八日目に山鳩二羽か家鳩のひな二羽を会見の天幕の入口の祭司のところに持って来なければならない。

6:11 祭司はその一羽を罪のためのいけにえとし、他の一羽を全焼のいけにえとしてささげ、死体によって招いた罪について彼のために贖いをし、彼はその日にその頭を聖なるものとし、

6:12 ナジル人としての聖別の期間をあらためて【主】のものとして聖別する。そして一歳の雄の子羊を携えて来て、罪過のためのいけにえとする。それ以前の日数は、彼の聖別が汚されたので無効になる。

6:13 これがナジル人についてのおしえである。ナジル人としての聖別の期間が満ちたときは、彼を会見の天幕の入口に連れて来なければならない。

6:14 彼は【主】へのささげ物として、一歳の雄の子羊の傷のないもの一頭を全焼のいけにえとして、また一歳の雌の子羊の傷のないもの一頭を罪のためのいけにえとして、また傷のない雄羊一頭を和解のいけにえとして、

6:15 また種を入れないパン一かご、油を混ぜた小麦粉の輪型のパン、油を塗った種を入れないせんべい、これらの穀物のささげ物と注ぎのささげ物を、ささげなければならない。

6:16 祭司はこれらのものを【主】の前にささげ、罪のためのいけにえと全焼のいけにえとをささげる。

6:17 雄羊を和解のいけにえとして、一かごの種を入れないパンに添えて【主】にささげ、さらに祭司は穀物のささげ物と注ぎのささげ物をささげる。

6:18 ナジル人は会見の天幕の入口で、聖別した頭をそり、その聖別した頭の髪の毛を取って、和解のいけにえの下にある火にくべる。

6:19 祭司は煮えた雄羊の肩と、かごの中の種を入れない輪型のパン一個と、種を入れないせんべい一個を取って、ナジル人がその聖別した髪の毛をそって後に、これ

らをその手の上に載せる。

6:20 祭司はこれらを奉獻物として【主】に向かって揺り動かす。これは聖なるものであって、奉獻物の胸、奉納物のももとともに祭司のものとなる。その後、このナジル人はぶどう酒を飲むことができる。

6:21 これがナジル人についてのおしえである。ナジル人としての聖別に加えて、その人の及ぶ以上に【主】へのささげ物を誓う者は、ナジル人としての聖別のおしえに加えて、その誓った誓いのことばどおりにしなければならない。」

1:12-13ハンナを見ていた祭司エリの反応

祭司エリのことをどう思いますか？

1:12 「ハンナが【主】の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。」長く祈り続けるハンナに気づいたエリはハンナの口元を見ていた。いったいどうしたことかと思ったのではないか。

1:13 ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。深い憂いの念からハンナは言葉にならない祈りを捧げていた。呻くような祈りを捧げていた。

参考)ローマ 8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

1:13それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。1:14 エリは彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。」

新約聖書で、例えば使徒の働き 2 章などで、信者が聖霊に満たされて異言で語っている時に、酒に酔っていると間違えられたことがあったので、エリもハンナに対して同じような誤解をした。

1:15-16ハンナの答え

ハンナは自分に悩みがあり、憂いもあり、いらだちもあったため、主の前に、心を注ぎだす祈りをしている、長く祈っていたことを伝えた。

1:17祭司エリの預言的な言葉と祈り

「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。」エリは祭司としてのお仕事はちゃんとしているね。子育てには失敗しているみたいだけど。励ましと祈りと預言。神のことばを伝えている。

1:18祈りの結果

「はしためが、あなたのご好意にあずかることができますように」と言った。エリは言葉を神のことばとして受け取った。その結果、「帰って食事をした。彼女の顔は、もは

や以前のようにではなかった。」神様からの解決と確信が与えられた。神への信頼と信仰が与えられた。家庭内のトラブルを神は用いて、ハンナは請願を立てるまでの祈りに導かれ、その祈りはイスラエルの民に必要な預言者を生む器を探しておられた神の御心と一つになり、祈りが答えられるようになった。

その後・・・

1:19 翌朝早く、彼らは【主】の前で礼拝をし、ラマにある自分たちの家へ帰って行った。エルカナは自分の妻ハンナを知った。【主】は彼女を心に留められた。サムエルが生まれたのは主の御心による。「エルカナは自分の妻ハンナを知った。」これまでも夫婦生活はしていたのだけれど、特別だったのかもしれない。わざわざ書かれているし。

1:20 日が改まって、ハンナはみごもり、男の子を産んだ。そして「私がこの子を【主】に願ったから」と言って、その名をサムエルと呼んだ。シロにいた時に、はっきりとした答えを得ることができなかったが、信仰をもって戻り、請願の祈りが答えられ、男の子が与えられた。ハンナは、サムエルが祈りの答えであることをはっきりと認識している。サムエルの意味は、「彼の名は神」

さらにその後・・・

1:21-23

1:21 1年がたち、また年ごとのいけにえを捧げるためにシロに行く時が来た。子どもが生まれるのに、10か月近くかかるわけだから、主はすぐ祈りに答えてくださったことが分かる。この時点でサムエルは生まれて間もなかったはず。おそらくハンナは自分の立てた請願の話をも夫のエルカナにしたのであろう。だから、実際にサムエルが生まれて、「自分の誓願を果たすために上って行こうとした」。

1:22 これに対して、ハンナは自分の請願の内容通りに、一生サムエルが神に仕えることができるようになるまで、シロに行かないことにした。シロに行く時は、手放す時と心に決めた。このハンナの決断について(すぐにサムエルを主に捧げず留め置いたことについて)、「すぐに子どもを手放したくない気持ち」、「生活を楽しもうとした」というような記述があったが、そうだろうか？今は食糧事情が良くなっているが、昔はなかなか断乳しなかったはず(参考：創世記のイサクの乳離れのパーティー等)、祭司エリも生後間もない子を預けられても困っただろうし、主の働きをすることができなかったことを考えると、結構リーズナブルな決断ではなかったか。

1:23 このハンナの決意を夫のエルカナは尊重し、「あなたの良いと思うようにしなさい。この子が乳離れするまで待ちなさい。」と言ったが、神様にゆだねる余裕を置いて、「ただ、【主】のおことばのとおりになるように。」と言った。請願を立てたのに、妻の木が変わるといふ危険はあったかもしれないし、そうするとエルカナ自身が請願を破るこ

ともなった危険もあったのだが、そこは妻を信頼し、ゆだねているところが、なかなかの夫だなと思う。

また、モーセの母ヨケベデのことを思い出すと、この乳離れまでの重要な時期を信仰深い母が育てたことが、その子の人格形成に大きな影響を与えたと考えられるので、この時間を神がお許しになったと考えてよいのでは？何のおとがめもなかったし。

1:24-28サムエルを神に捧げる時が来た(乳離れの時)

「彼女は雄牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つを携え、その子を連れ上り、シロの【主】の宮に連れて行った。」(前出のナジル人の請願のところの聖書箇所を参考に)ハンナは請願の清めの期間が過ぎた時に捧げる捧げ物の用意をして、夫エルカナと宮に上っていった。「その子は幼かった。」ハンナは神様との約束を果たすために、まだ小さかったサムエルを手放した。

1:25-28エリとの再会

いけにえを捧げ、サムエルをエリのところに連れてゆき、主が願いをかなえてくださったので、サムエルは一生を主に渡されたものなので、そのサムエルを主に渡すために来たことを伝えた。

ハンナはかなり辛かったと思うけれど、ナジル人の請願はそう簡単に破ることができない請願ではなく、しかも主が願いをかなえてくださったのだから、喜んで捧げることができたのではないか。またサムエルに執着しないことにより、主はさらに子供を与えてくださった。

エルカナとその家族が毎年主に捧げ物をしに宮に行っていること、何度も礼拝を捧げていること、普段の生活における神様を中心としていることも、神に用いられる器となったことは想像に難くない。私たちも普段の素振りを大切にすることを忘れてはならないのでは？

I サムエル記 2 章

ハンナの祈り(ハンナの賛歌)1 節から 10 節まで

この賛歌は、新約聖書におけるマリアの賛歌に類似する(影響を与えたのではないかとよく言われる。

参考)ルカ1:46-55

1:46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、

1:47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

1:48 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。

1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、

1:50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。

1:51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散ら

し、

1:52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、

1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。

1:54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。

1:55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

ハンナの賛歌

自分自身が、男の子を与えられ、喜んでいると同時に、将来与えられるイスラエルへの救いを預言し喜んで主を賛美している。主は、ハンナに苦しい状況を起こし、キリスト預言に導き、イエスの母マリアにも影響を与える器となった。苦しみ、うめき、祈りについて、普通はマイナスに考えられることも、全知全能の神、主の手にかかるとは、主を信じる者にとって益となることを決して忘れてはならない、励ましになる。

2:1 ハンナは祈って言った。マリヤは言った。「私の心は【主】を誇り、わがたましいは主をあがめ、私の角は【主】によって高く上がります。私の口は敵に向かって大きく開きます。私はあなたの救いを喜ぶからです。わが霊は、わが救い主なる神を喜びたえます。

「私の心は【主】を誇り」ハンナは主を誇る、主をほめたたえている。「私の角は【主】によって高く上がります」主が私に力を与えてくださっている、励ましてくださっている。

「私の口は敵に向かって大きく開きます。私はあなたの救いを喜ぶからです。」ハンナは喜びで大きな口を開けている。「あなたの救い」とあるが、これは男の子(サムエル)が与えられたことであるが、「敵」と言っても、ここでは自分をいじめたペニンナ個人に対することではなくキリストのことを預言している。創世記3:15(わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。)で、女の子孫が蛇(サタン)を打ち砕くことが書かれているが、この「救い」のこと。

2:2 【主】のように聖なる方はありません。その御名は聖く、あなたに並ぶ者はないからです。私たちの神のような岩はありません。

ハンナは喜びの源を書いている。神は聖なる方であり、神以外にそのような方はいないからだと言っている。神を「岩」と呼んでいるが、荒野の旅をしている時、イスラエルに水を出させてくださった、いのちの水、今では聖霊を与えてくださるその、岩のことを思い起こさせてくれる。

2:3 高ぶって、多くを語ってはなりません。横柄なことばを口から出してはなりません。

心の思いの高ぶっている者を追い散らし、神は高ぶりをさげすまれる方。口から出るということは、心で思っているから、そしてそれが汚れを引き起こす。

まことに【主】は、すべてを知る神。そのみわざは確かです。1:51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、すべてをご存知な神は、約束されたことを必ず実行してくださる方。

4 節から 9 節まで逆転をなさる神が書かれている。

主の前に高ぶるのではなく、へりくだることにより、主が何をして下さるかを知ることができる。

2:4 勇士の弓が砕かれ、弱い者が力を帯び、1:52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、

2:5 食べ飽いた者がパンのために雇われ、飢えていた者が働きをやめ、1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。不妊の女が七人の子を産み、多くの子を持つ女が、しおれてしまいます。具体的には、「不妊の女」は、ハンナ自身のことで、子どもの人数は実際は息子 4 人と娘二人の 6 人で、人間の数だけれど、ここでは神の数、完全数の七人になっている。「多くの子を持つ女」は、ペニンナのことであろう。しかし、一般的な預言も含まれる。

2:6 【主】は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。

2:7 【主】は、貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのです。

2:8 主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人を、あくたから引き上げ、高貴な者キリストとともに、すわらせ、彼らに栄光の位を継がせます。まことに、地の柱は【主】のもの、その上に主は世界を据えられました。

2:9 主は聖徒たちの足を守られます。悪者どもは、やみの中に滅びうせます。まことに人は、おのれの力によっては勝てません。

最終審判者である、神に全てをゆだねている。

2:10 【主】は、はむかう者を打ち砕き、その者に、天から雷鳴を響かせられます。

【主】は地の果て果てまでさばき、ご自分の王に力を授け、主に油そそがれた者キリストの角を高く上げられます。」キリストにある信者の希望。

サムエルが宮で祭司エリのもとで主に仕え始めた

2:11 その後、エルカナはラマの自分の家に帰った。幼子は、祭司エリのもとで【主】に仕えていた。

聖い生活をしているエルカナ一家とは対照的なエリの息子たちの話がここに挿入されている。このことを、ハンナは気づいていたかもしれないが、それでも、自分の請願を果たすこと、神を中心にするを優先したハンナの勇気、息子の成長を神にゆだねることができたことを、お母さんたちは学ぶことができるのではないか。

2:12 さて、エリの息子たちは、よこしまな者で、【主】を知らず、

2:13 民にかかわる祭司の定めについてもそうであった。だれかが、いけにえをささげていると、まだ肉を煮ている間に、祭司の子が三又の肉刺しを手にしてやって来て、

2:14 これを、大なべや、かまや、大がまや、なべに突き入れ、肉刺しで取り上げたものをみな、祭司が自分のものとして取っていた。彼らはシロで、そこに来るすべてのイスラエルに、このようにしていた。

2:15 それどころか、人々が脂肪を焼いて煙にしないうちに祭司の子はやって来て、いけにえをささげる人に、「祭司に、その焼く肉を渡しなさい。祭司は煮た肉は受け取りません。生の肉だけです」と言うので、

2:16 人が、「まず、脂肪をすっかり焼いて煙にし、好きなだけお取りなさい」と言うと、祭司の子は、「いや、いま渡さなければならぬ。でなければ、私は力づくで取る」と言った。

2:17 このように、子たちの罪は、【主】の前で非常に大きかった。【主】へのささげ物を、この人たちが侮ったからである。

一方、サムエルは…

2:18 サムエルはまだ幼く、亜麻布のエポデを身にまとい、【主】の前に仕えていた。いじらしいサムエルの働きを思い描けそうですね。

2:19 サムエルの母は、彼のために小さな上着を作り、毎年、夫とともに、その年のいけにえをささげに上って行くとき、その上着を持って行くのだった。

エルカナ家はいつもと変わらず、定期的に主に捧げ物をし、礼拝をした。ハンナが我が子に会えるのは、年に一度。家でハンナは、息子のために祈りつつ、上着を裁縫したのであろう。

2:20 エリは、エルカナとその妻を祝福して、「【主】がお求めになった者の代わりに、【主】がこの女により、あなたに子どもを賜りますように」と言い、彼らは、自分の家に帰るのであった。

祭司エリ自身は、父親失格だったかもしれないが、祭司の務めはしっかり果たした。これまた預言的に、サムエルを「【主】がお求めになった者」と呼んでいる。そして、エルカナ夫婦が子供を授かることができるように、祝福の祈りをした。

2:21 事実、【主】はハンナを顧み、彼女はみごもって、三人の息子と、ふたりの娘を産んだ。少年サムエルは、主のみもとで成長した。そのエリの祈りは聞かれ、またハンナもサムエルを捧げることにより、さらに多くの祝福、子どもたちを得ることができた（ハンナの賛歌にも書かれていたが）。そして、サムエルも主のみもとで成長するという特別な祝福にあずかることができた。